

◆連載-Vol.33

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかたに・まさと)  
1948年神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。

## モダニズムの向こうへ その7

### 状況は変わる

これまで延々と書き連ねてきたのは、現代の建築がル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエから始まったのではなく、古典以来、様々な要因によって様式を変化させながら連綿と続いてきたことを示したかったからである。

日本が明治以降、今では和風と呼ばれる様式から離れて近代化、言い換えれば洋風建築に取り組んできた。始まりはジョサイア・コンドルであり、彼に教えを受けた新古典主義建築からである。その代表が辰野金吾や片山東熊、中條精一郎などであり、彼らを第一世代と呼ぶのであれば、村野藤吾や吉田五十八、今井兼次、土浦亀城、坂倉準三、前川國男などは第二世代といえよう。彼らは新古典から離れ、今見るようなモダニズム建築に取り組んだ世代である。

その一方で、建築教育から伝統建築や木造建築は排除されてしまっていた弊害が現在に及んでいるのだが、ここではそれを問うまい。

佐野利器が主張した合理主義への反発から生まれた分離派建築会は芸術性を主張したが、決して彼らだけではなく、坂倉にしても前川にしてもモダニズムの思想を鵜呑みにはしなかった。設計のどこかに伝統や日本的な意匠を、あるいは芸術性を取り入れようと戦ってきた。もちろん、佐野であっても以前再録した「合理主義といふもの」をよく読めばわかることだが、巷で言われているほどの堅物ではなく、むしろ形式的な合理主義には批判的で、メンタルな面までも含めた合理性を説いていたことがわかるのだが、教条的に佐野をとらえていたように思える。

ごく最近、岡山に行った折に川島甲士の設計による「津山文化センター」(1965)を見る機会があった。写真でおわかりいただけるように、深く突き出した軒先を支えているデザインはどう見ても枅組の援用である。また、写真を撮り損なったが内部のホワイエの壁面はに様々な色彩の陶板が張り巡らされている。

前川の東京文化会館のインテリアについても以前書いたように、やはりモザイクタイルが多用されている。村野の装飾性については今更言うまでもないだろう。

日本現代建築の第一世代を辰野金吾に代表される新古典主義一派と位置付けるならば、モダニズムの台頭期にありながら、それが単なる建物を造るためのシステムでしかなく、

平準化されてしまいそうな建物のあり方に異を唱えたのが第二世代と言えよう。彼らの実績を見ると、単に機能を果たすだけの箱にするのではなく、生きた施設としてどのような息吹を与えるか、真剣に取り組んでいた姿が読み取れる。これが第二世代である。

さらに続くのは建築表現をいかに自分の思想に近づけるかという試みである。そこには芸術的な要素や哲学的な思惟もあろう。あるいは都市のランドスケープとしての形態を表現しようという試みもある。

それが篠原一男や吉阪隆正である。それぞれ表現の手法も思想も異なるが、建築を通して新たな思考を展開し、建築界に多大な影響を与えたことに間違いはない。ただし、いわゆる社会の全般的な流れの中で見ると、異端のように見えてしまう。

一方で、モダニズムの思想を純粋に追掛けた建築家もいた。しかし、機能と合理性を追求しながらも、象徴性や居住性など、様々な要素をそこに込めていったことは重要である。機能と合理性を追い求めれば、結果的にはデザインとして凡庸にならざるを得ない。それが現代都市の多くを埋めてきた結果が現状である。

このように見てくると、現在にまで記憶に残り語り継がれる建築家や建物には設計者の思想が反映されていることがわかる。

様式建築華やかなりしころには、とりえず様式に従えばよかった。しかし、その中にも異端と呼ばれる建築家はいたが、いまでは建築史の文脈の中に位置付けられている。様式の変化は、既存の様式の中から新たな形式を導き出すことであった。

思いつきであろうと深い思索の果てに導き出されたものであろうと、新しく生まれ出た形が社会に受け入れられてその時代の流行となる。一時の流行とはなりながらも早々に姿を消したのも少なくない。しかし時間を超えて継承されると新たな様式として認知され、建築史の文脈に位置を占めるのである。

1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博を経過して急成長する建築産業界は、いわば建築界の黄金時代だった。国を挙げての大イベントの施設はいずれも丹下健三をメインとして、建築界がこぞって参加した。

万博やオリンピックはいつにおいても内容的には建設技術の博覧会だった。1851年にロンドンで開かれた第1回万国博覧会ではジョセフ・パクストンの「水晶宮」であり、1967年の

カナダ・モントリオール博ではモシェ・サフディの「アビタ67」やバックミンスター・フラーの「ジオデシック・ドーム」が構造システムや建設システムを明快に造形化して話題を呼んだ。

それはともかく、戦後の日本の建築界を担ってきた世代が活躍していた頃、その間には60年と70年には安保闘争があったのだがこの時代に学生だったり、卒業して実務に就いていた若い世代は、このような状況をどのように見ていたのだろうか。

公共建築に参加できるのは高名建築家や既存の大手ゼネコンであり、自分たちとは縁のない世界と映っていたのではないだろうか。まだまだアトリエ事務所等という言葉すらなかった時代である。

そんな社会状況に対して、若い世代は違和感や閉塞感を感じていた。公共建築に携われなくとも、建築家であることを志していた。この頃、教科書的に読まれていたのはジークフリート・ギーディオンの『時間・空間・建築』であり、ペーター・ブレイクの『現代建築の巨匠』であった。これらは示唆に富んだ書籍ではあったが、古典的でもあったからとても満足できず、何かさらなるものを求めていた。

閉塞感を感じていたのは若い世代に、すでに活躍していた建築家にも少なくはない。そんな彼らに刺激を与えたのが原広司や磯崎新、竹山実たちである。彼らの著作や翻訳した本は、建築界の新しい状況を間違いなく作り出したといえる。

刊行年代順に並べれば、原の『建築に何が可能か』(1967)、磯崎新の『建築の解体』(1975)、そしてチャールズ・ジェンクスの著作を竹山実が翻訳した『ポスト・モダニズムの建築

言語』(1978)である。

原は『建築に何が可能か』の冒頭で、建築とは何かと問うのは不毛であり、建築に何が可能かを問えと檄を飛ばした。磯崎の『建築の解体』は、まさにモダニズムに対する批判であり、竹山が訳した『ポスト・モダニズムの建築言語』では合理主義・機能主義を超える指針を示した。

1979年の新建築誌に榎文彦が寄せた論文「平和な時代の野武士たち」で野武士と名指しされた多くが1941年生まれだった。これに感化されたのは野武士たちだけでなく、多くの若い世代が含まれていた。

1941年生まれには伊東豊雄、安藤忠雄、長谷川逸子、毛綱毅曠、仙田満、早川邦彦などがいて、「花の中三トリオ」ではないが、彼らを「花の16年」と呼んでいたことを思い出す。16年とは昭和のこと。これに対して、平和な時代をつくったのが榎文彦をはじめとする1928年生まれ。昭和で言えば3年、ヒトケタ世代である。いわば「花の3年組」で、すでに紹介した菊竹清訓、岡田新一、池原義郎、林昌二・雅子などがそうで、昭和3年も16年もまさに建築家の当たり年であった。

そして状況は変わり、「花の16年」世代とそれに続く人たちの舞台ができてくる。

「モダニズムの向こうへ」のシリーズになってからは建築家を生年順で紹介してきた。今後は時の流れとともに建築家を紹介していく予定である。そうしなければ現在の建築界の全体像が見えてこないし、もともとそれがこの連載を始める契機だったのだから。

(続く)



「津山文化センター」 軒先



ディテール

写真：筆者撮影